

天文台の森

—東京天文台と共に四半世紀—

井上美夫*

その周辺ワサビ田

交通事故だ、公害だと騒々しいなかで超然と聳えているのが私達の天文台の森である。この森は私の知っている限りでは、たいした変化もなく24年を経たいまもお武蔵野の面影をとどめている数少ないところの一つではないだろうか。その当時正門の小径をだらだら下りていくと小川があって夏などはそれはそれは冷たい水が流れていた。

ときおり西瓜など漬けておいて食べたものだが、いまにしてその味を忘れることができない。清水はその下手にいくと急に崖のふところが広く拓けていて、そこがワサビ田である。砂利のなかにワサビが一面に植え付けられていて、その間を流れる水はすき透っていてぴかぴかと輝き、ワサビの葉一葉にささやくように音たてて流

* 東京天文台（昭和46年1月退職）

れてゆく、まさに生きもののように思える。

ときに水スマシがピーンピーンとまるい円を画きながら流れに逆って泳いでゆく。これはある春の昼さがりの情景であった。

その頃配給にサシミなどたまにあると、こっそりここに忍んでいってちょっと一本失敬してきて食べたものだが、ツーンと鼻に沁みる香りに涙を押えきれずに、その罰をざんげさせられたものだ。またこの沢一带には小指の頭程もある源氏ホテルがいて、6月の夜空にスイスイと飛ぶさまはまさに壮観であった。

ホーホーホテル来い ホーホーホテル来い

あっちの水ざあにがいぞ

こっちの水ざあ甘いぞ

ホーホーホテル来い

筐を担った螢狩りの一団のこんなワラベ唄もこの附近

好評発売中

1971
年版

天文年鑑

1971年の天文の出来事が一目でわかる天文年鑑

71年夏には久しぶりの火星大接近が観測できるので、今年はとくに火星の予報記事に力を入れてあります。グラビアにはピク・デュ・ミディ天文台(フランス)から送られた土星の新リング発見の写真や、オーストラリアで撮影された国産衛星「おすみ」の写真をのせました。

天文年鑑編集委員会編

●B6判/122ページ/定価260円



天文用語事典

近刊予告

●B6判/250ページ

予定価550円/天文ガイド編

天文用語を、天体器械・写真、太陽・地球・月・こよみ・人工衛星・彗星、太陽系、恒星・銀河系の4項目に分類し、約500語を簡明に解説したハンドブックです。天文年鑑、天体観測ハンドブックとともに、アマチュア天文家は、ぜひ1冊そなえて下さい。

誠文堂新光社 東京・神田錦町1の5 振替東京6294

ではもうきかれなくなった。

のびゆく動き

私が天文台に入ったのは昭和22年1月21日で終戦直後であり、関口台長がやめられて萩原台長に代わった当初であったから、天文台の苦難の時代であったようだ。

台長官舎にはまだ関口台長のご家族と女婿の朝永振一郎教授が同居しておられて、よく奥さんが隣組の回覧板をもってこられて親しく言葉を交したこともあった。その後間もなく朝永教授は一台のトラックに荷物を満載して引き移って行かれたが、その荷物の上にあの瘦躯を折り曲げて乗っておられ、にやっと会釈して出て行かれた。その光景はつい昨日のように思えてくる。私はそれから萩原台長、宮地台長、広瀬台長、現在の古畑台長の4人の台長に仕えたことになるが、私の在職23年余月に亘る間には職員数も倍以上の200名になり、施設の面においても、乗鞍・岡山・堂平・野辺山をはじめ、分光・測光各実験室・工場・電気室・図書・太陽電波・宇宙電波・本館・銀河系その他の建設、増設など正にのびゆく天文台である。門外漢の私ごとき者にすら、その規模と内容の充実したことが察せられる。

ロマンチスト敗北の記

あるとき会計課長三輪克明、庶務課長工藤房之助の両氏に呼ばれておききしたことによると、萩原台長が独身者の栄養のことを非常に心配しておられるので何とか食堂の開設を考えて欲しいという懇請であった。私も台長がそれほどまでに職員のことを考えておられるのかと感動し私の身をお役にたてようと決意した。それから食堂設立に取り組み、間もなく曲りなりに昭和25年の秋より天文台に食堂らしきものが開設され、常食者約15名から出発した。現在地理院におられる檀原さんが中心になって食費の割り出しをされたのであるが、確か朝食12円、昼食25円、夕食30円だったと記憶する。このささやかな食堂利用者のなかから、いまをときめく東大天文学教

室のU教授、東北大学のT教授、東京天文台のK部長、A部長、M部長をはじめとする教授、助教授、および天文台を支える人々が輩出された。

私は食堂経営を依頼されてから、天文台の環境と将来を考えて、構想を練った。市井から隔絶したこの特殊な環境を利用して、一つこんな理想郷を建設してやろうと自分なりに大きな目標をもったのである。それは食堂と牧場経営とを両立させて、独立採算のとれる経営をもってゆくこと。天文台当局と直接関係のない内容にすること。例えば、外郭団体のような形式をもってゆき食事と牛乳を安く供給するという考えであり、このことは年を重ねるごとに体験と教訓とが加わり、「これはゆけるぞ」という自信になってきた。人は希望をもつとき心が明るく張りのある日々が訪れるものである。この私の目標とした夢を構図として分り易く示すならば、森林地帯に囲まれた台地……ポプラ並木と牧草のなかに点在する施設、そこに放牧された乳牛の長閑なき声……自然と科学が渾然と調和された風景、北欧的牧歌的な理想郷を夢に画いて胸ふくらませていたものだったが、「国立」という大きな壁を遂に打ち破ることができなかった。加えて食堂の方は職員の増加しないことと、物の出回りの良くなるにつれて、経営に矛盾が起り遂に33年7月こところざしと違って、私は守衛所に転出することになった。それでも8年間食堂経営と安い牛乳(一合7円)を官舎と職員に供給出来たことは、せめてもの慰めとなった。

私の大きな野望・天文台エゴイズムの構想は破れ去ってしまったが、また私の胸深くうづもれてしまったけれども、ときとして胸ついて出てくる!! それは若き日の感激である。最後に天文台の自然の保護のために、願わくば構内の雑草の処理に当ってなるべく薬剤散布を極地にとどめて頂き、コオロギ、馬追、クツワムシの棲む武蔵野の自然の原野の姿をできるだけとどめておいて頂きたいとおもう。いまはただそれだけである。

学会だより

日本天文学会改革委員会(仮称)の発足

学会改革の具体的問題(たとえば支部の体制)を煮つめるために、秋の年会で設置のきまった改革委員会(仮称)の人選を進めてきましたが、各支部の推薦をもとに、旧ワーキング・グループを含めて次の諸氏で発足するこ

とになりました。なお、これにともない運営検討委員会は解散になりました。

記

理事: 末元善三郎, 青木信仰, 守山史生, 近藤雅之
 東北: 若生康二郎
 東京: 小平桂一, 菊池 仙, 木村精二, 小暮智一名
 古屋: 鰐目信三
 京都: 川口市郎, 平田龍幸
 (紙面の都合で、44ページにも学会だよりがあります)